

小学校教員養成課程における大学生の英語を 読むことへの意識の変容

－ 英語絵本を使用した多読活動の意義 －

Changes in Consciousness and Attitude of Reading in English
among University Students in the Elementary School Teacher Training Course:
Extensive Reading of Picture Books and its Significance

松井千代

MATSUI Chiyo

キーワード：小学校教員養成外国語コア・カリキュラム、英語絵本、英語多読

1. 研究主題の背景

2020年度より、外国語活動が3・4年生で必修授業となったことに加え、5・6年生では教科としての英語である「外国語」科が始まった。小学校教員に求められる資質・能力に外国語（英語）が新たに加えられたことは、現場教員にとっても、また、これから教員を目指す大学生にとっても重要な課題となっている。大学の教員養成課程における科目には、英語を教えるための専門知識に関する科目と指導法に関する科目が、免許取得に必要な科目として新たに加えられた。これらの科目で身に付ける内容は、文部科学省が2016年に開発した小学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラムに基づき、「外国語に関する専門的事項」及び「外国語の指導法」の中に示されている。なかでも、「外国語に関する専門的事項」には、英語の技能の向上、音声・語彙等の基本的知識、第二言語習得に関する基本的知識、絵本や歌などの児童文学に関する理解、異文化理解等、多岐にわたって盛り込まれている。

これらを学ばなければならない教員養成課程を持つ大学に所属する学生や小学校現職教員を対象とした調査では、「英語は嫌い（苦手）であるがために、児童に英語を教えることが不安である」（名畑目, 2014; 猪井, 2019）という意見を多く見ることができる。今後、教員養成課程における英語関連の授業において、学生の英語嫌いや英語に対する苦手意識を克服するための指導を講じる必要があるのではないかと考える。

また、国立大学教育学部における初等英語科指導法を受講した学生の英語運用能力の調査では、コア・カリキュラムの目指すCEFR¹のB1レベル相当以上の英語力達している学生は19%と低く、英語力の自己評価を問う質問紙調査でも、CFERのB1レベルについて「ややできると思う」及び「できると思う」と解答した学生は、「読むこと」のみ59.2%と半数を超えたが、残りの4領域では半数に届かない結果となったことが示されている（酒井・内野,

2018)。学生が、英語運用能力について自信をもつことができなければ、児童に英語を教えることに不安を感じる事が予想される。そこで、CEFRのB1レベルにおおよそ対応する実用英語検定2級程度までの能力を、段階的に身に付けさせる指導を講じる必要があるのではないかと考える。

小学校の教員養成課程で学ぶ学生には、指導対象である児童に対して、英語を学ぶ意義を伝えたり、積極的に英語を学ぼうとする意欲を身に付けさせたりすることができるようになってもらいたい。そのためには、学生自身が進んで英語を学ぶようになり、英語力を高め、英語に対して自信をもつことが大切である。そこで、英語力を高め、英語学習、中でも英語を読むことに対する内発的動機を高めることのできる多読活動を授業内で行おうと考えた。

本研究では、英語力ではなく、英語に対する意識の変容について調査することを目的とする。具体的方法として、大学1年生における「外国語に関する専門的事項」を扱う授業において、小学校で教材としても用いられる英語絵本を使った多読を行うことで、小学校教員養成課程で学ぶ大学生の「英語を読むこと」に対する意識がどのように変化するのか検証する。そして、小学校教員養成課程において英語絵本の多読を行うことの意義を考察する。

特に、多読（及び絵本を用いた学習）の先行研究や先行実践の成果を鑑み、以下の3点について筆者の考えを述べることにする。

- ① 本学学生の英語学習（特に英語を読むこと）に関する情意面の変化
- ② 多読用図書（特に絵本）を読むことを通じた異文化への気づき
- ③ その他、教員を志望する学生としての特徴的な視点の獲得

2. 先行研究と本研究における多読活動について

ここでは、先行研究における多読の定義やその実践方法、学習者に与える効果や影響を概観した後、本研究における多読実践及び目的を確認する。

2.1 多読の定義

多読とは文字通り多く読むことであるが、Day and Bamford (1998) によって多読の10原則が示されている。また、日本では、英語多読研究会から多読の3つの原則が、日本多読学会からは多読の定義が、それぞれ示されている。

Day and Bamford (1998) では、多読の10原則を以下のように提唱している。

- ・ The reading material is easy.
- ・ A variety of reading material on a wide range of topics must be available.
- ・ Learners choose what they want to read.
- ・ Learners read as much as possible.
- ・ The purpose of reading is usually related to pleasure, information and general understanding.
- ・ Reading is its own reward.

- ・ Reading speed is usually faster rather than slower.
- ・ Reading is individual and silent.
- ・ Teachers orient and guide their students.
- ・ The teacher is a role model of a reader.

英語多読研究会は、学習者が多読を長く続けるためには「楽しくスラスラ読む」ことが重要であるとし、以下のような3つの原則を示している。

- ・ 辞書は引かない（引かなくてもわかる本を読む）
- ・ 分からないところは飛ばして前へ進む（わかっているところをつなげて読む）
- ・ つまらなくなったら止める（上記の原則で楽しく読めない本は読まない）

英語多読研究会を前身とする日本多読学会では、上記の3原則をもとに以下のような定義を示している。

- ・ 辞書をできるだけ引かずに
- ・ もとの英文を日本語に訳すことなく
- ・ 理解度 100% にこだわらず、理解度 80-90% で
- ・ 大量に、長時間にわたって英語の本を読む

以上の点から、多読に関する研究では、学習者の様々な読解レベルに対応でき、且つ学習者の興味関心に沿うような図書を可能な限り用意し、読む本を指導者側から指定せず学習者に自由に選ばせて読ませることが必要となる。

2.2 多読の実践方法

多読は、校種を問わず、授業内に行われる場合と授業外で行われる場合がある。授業内での実践例としては、大学や短期大学の英語の授業における実践（山下，2007；黛，2005）、高校における1時間の授業全体で多読を行った実践（内山，2008）、中学校における週1回の授業開始時10分間で多読を行った実践（Matsui & Noro, 2010）等がある。また、授業外での実践は多く、例えば課外で多読クラブを発足して行った実践（鈴木，1996）等が見られる。

授業外多読では学習者が自由に読書を楽しむことができるが、高瀬（2010）は授業内多読について、学習者の読書時間を確保でき、指導者が学習者の読書状況を確認できるという指導上の利点と、学習者が集中して読書を行うことができるという利点を示し、授業内多読を通して読書週間を学習者に定着させる必要性を述べている。

2.3 多読の英語力に関する効果

多読と英語力向上との関係を調査した先行研究は多く見られる。

Reading Comprehension が向上した例（Elley & Mangubhai, 1983; Mason and Krashen, 1997; Al-Homoud & Schmitt, 2009）や、Listening Comprehension が向上した例（Elley & Mangubhai, 1983; 鈴木，1996）をはじめとして、Receptive skills に関しては多くの研究がなされており、多読による効果があるといった報告が多く見られる。一方で、Writing 能力が向上した例（Hafiz & Tudor, 1989）のような実践研究は見られるものの、Productive skills につ

いては先行研究が少なく、多読の効果を明確にすることはできない。

語彙習得に関しては、語彙が習得されたという報告 (Sheu, 2003; Maruyama, 2010) がある一方で、習得されたと言うことはできないという報告 (Tudor & Hafiz, 1989; Al-Homoud & Schmitt, 2009) もある。語彙習得に関しては、語彙との遭遇回数が影響すると考えられており、多読による効果が見られるかどうかは今後のさらなる研究を待たなければならない。

上記以外にも、読解速度の向上 (鈴木, 1996)、文脈処理能力の向上 (有田, 2009)、単語等の認知の自動化 (Horst, 2009; 今村, 2011; 松井, 2001) も、多読の効果として報告されている。

2.4 多読の英語学習に対する情意面の効果

多読による英語学習に対する情意面に関する実証研究は校種を問わず行われており、英語が嫌いな学習者が減少し英語学習に対して肯定的な思いをもつようになったという報告 (長谷ほか, 2015; 水野, 2016; 釣井, 2016) や、英語を読むことに対する不安感が軽減したという報告 (Takase, 2007; 松井, 2008) が多く見られる。筆者らが行った短期大学生に対する実践研究においても、英語を読むことに対する不安感の軽減や、読書量に従って英語を読むことに対する自信や有能感が高まる様子が見られた (松井・松井, 2016, 2017)。

2.5 学習者の英語を読む目的の変化

多読による読む目的の変化については、動機づけの観点と学習目的の観点からその影響が述べられている。

動機づけに関しては、英語を「ストーリーを楽しむために読む」ようになった事例が多く報告されている。

学習目的の変化に関しては、松井・松井 (2017) が詳しい。松井・松井 (2017) では、短期大学幼児教育学科の1年生を対象に半期間13回の英語の授業の中で10～20分の多読を行い、読書量の違いにより英語の読解能力及び情意面に与える影響を調査した。その結果、読書量が読解能力に与える効果については見られなかったものの、英語を読むことに対する不安感の軽減は見られた。しかし、読解速度が遅くなるという先行研究に反する結果が得られたことからその原因を、半構造化面接を通して調査したところ、将来の仕事の場面を想定して、幼児に対して読み聞かせをするように英語絵本を読んでいる学生が複数いることが分かった。

2.6 本研究における多読の実践方法と本研究の目的の確認

本研究では、2.1で確認した多読の定義を踏まえ、授業内多読を行うこととする。多読を行う目的は、英語力の向上と英語学習に対する情意面の肯定的な変化を図るためであるが、第1章で述べたように、本研究では情意面のみの分析及び検証を行うこととし、英語力の検証に関しては、別の機会に行うこととする。

3. 研究

3.1 調査対象者

本学文学部教育学科において、2018年度後期科目「児童英語」の受講者54名（1年生50名

4年生4名）と、2019年度後期「児童英語」の受講者119名（1年生114名・2年生3名・4年生2名）に対し、それぞれ第1回と第15回の授業で「英語を読むこと」に関する選択式アンケートを行った。そして、両アンケートに回答した受講者（2018年度は50名、2019年度は118名）を「英語を読むこと」に対する変容を見るための調査対象とした。また、それぞれ多読活動終了後に多読活動自体に関する記述式アンケートを行った。そして、そのアンケートに回答した受講者（2018年度は54名、2019年度は116名）を、多読に対する意識調査を行う対象とした。

1年生後期に開講される科目「児童英語」は、本学の小学校外国語（英語）コア・カリキュラムにおける「外国語に関する専門的事項」を履修する科目にあたる。2018年度の第1回調査（以下第1回調査と記述）は本学のカリキュラムが改正される前に行ったため、本科目は教員免許に関わる選択必修科目のうちの一科目であった。しかし、2019年度の第2回調査（以下第2回調査と記述）からは、本科目は教員免許に関わる必修科目となっている。第1回調査では、比較的英語が得意である学生や小学校で英語を教えることに関心が高い学生が履修していることが予想され、第2回調査では小学校教員免許を取得するすべての1年生が履修をしていることから、この2回の調査の学生は全く同質ではないと考えられる。本研究では、英語絵本の多読前後における学生の意識の変容について調査することが主目的であるが、選択して履修する科目であった年度の学生と、必修科目となった年度の学生との変容に相違がないかについても比較し検討していく。

3.2 使用教材と実践手順

授業内で行われた英語絵本多読の実践について、使用教材と実践手順について述べていく。

絵本教材として、英語多読研究会の「SSS 書評システム」による多読用図書の読みやすさレベル（YL）を参考に、YL0.1から3.8のCambridge, HarperTrophy, Macmillan, Oxford, Penguin, Random House, Scholastic, Thomson等の出版社によるGraded Readerという英語学習者用の難易度別に分けた読み物やLeveled Readerという母語話者用の難易度別に分けた読み物、*Curious George*などに代表される簡単な英語の児童書を、計429冊を準備した。それらの本を難易度順に5つのレベルに分け、学生が難易度に応じて本を選びやすいようにした（表1）。

表1 使用教材のレベル ジャンル及び冊数

レベル	レベル分け(SSSのYL)	主なジャンル(SSS書評システム)	冊数
Yellow	0.0 - 0.3	幼児向け, 古典, 動物	82
Green	0.4 - 0.5	幼児向け, 古典, ほのぼの, 動物, フィクション, 自然科学, 喜劇, 実話	82
Blue	0.6 - 0.9	幼児向け, 古典, 人間もの, 推理もの, フィクション犯罪もの, 学園青春物	88
Red	1.0 - 2.2	ほのぼの, 喜劇・風刺, 推理もの, 恋愛, 人間もの, 犯罪もの, 伝記もの	108
Purple	2.0 - 3.8	喜劇・風刺, 推理もの, 恋愛, 人間もの, 犯罪もの, 伝記もの	69

本にはレベル別に色分けされた分類シールを貼り、レベル別にコンテナに収納した。分類シー

ルには、通し番号、ジャンル、その本の総語数を書いた。

このように準備した多読用教材を使用して、以下のような手順で多読を行った。

[毎回の活動（手順）]

- ① 授業時に、レベルごとに本の入ったコンテナを教室へ運搬する。
- ② 授業終了15分前に、コンテナを最前列の空席に間隔を置いて並べ、多読を始める合図を出す。学生は、好きなレベルの本を1冊選び座席に戻る。戻った者は読書を開始する。
- ③ 時間内に1冊読み終えた学生は、感想用紙に感想を記入し、本を返却する。
- ④ ③で本を返却した学生は、次に読む本を選び、席に戻る。
- ⑤ 授業終了の3分から5分前のところで、間もなく終了であるアナウンスをする（「今読んでいる本を最終にし、読み切るか、話の区切れを見つけて読んでください」）。
- ⑥ 読み切った学生は感想用紙に必要な事項を記入する。
- ⑦ 時間内に読み終えられなかった学生にはページ数を記録させる。
- ⑧ 感想用紙を教員に提出させ、本をコンテナに回収する。

3.3 多読実践期間

第1回調査では2018年9月から2019年1月まで後期15回の授業期間中13回（第2回授業から第14回授業で実施）の授業内で、第2回調査では2019年9月から2020年1月までの同回の授業内でそれぞれ英語絵本の多読を行った。学生には各回授業の最後に多読用図書を読ませた。多読のための時間は各回で若干異なり、およそ10分から20分程度であった。どちらの調査でも、総時間はおよそ180分となった。

3.4 データ収集

本研究では、英語絵本を使った多読を行うことで、小学校教員養成課程で学ぶ大学生の「英語を読むこと」に対する意識がどのように変化するか検証するために、3.1で述べたように2つの質問紙調査を行った。

まず、多読が学生の英語を読むことに対する情意面にどのような影響を与えるかを調査するために、「『英語で読むこと』に関するアンケート」（図1）を行った。学生には多読実施前（第1回目の授業）と多読実施後（第15回目の授業）に回答をさせた。このアンケートはTakase（2007）を参考に作成されており、第二言語学習や教育心理学の知見をもとに全31項目で構成された5件法のアンケートとなっている。多読実践前後の比較することで、情意面における変化を分析した。

続いて、第15回の授業で多読に対する意識を調査するためのアンケートを行った。このアンケートは、学生の「多読に対する印象」や「多読経験後に感じられた変化や得られた学び」に関する自己評価を6項目4件法で選択させるアンケートと、その理由や多読活動に対する感想を自由記述で回答する記述式アンケートとなっている。学生には、最終授業日にこれまで多

読実践で書いた感想用紙を提出させるとともに、このアンケートに回答させた。選択式アンケートからは多読が学生に受け入れられていたかどうかを、記述式アンケートからは「多読を通した異文化への気づき」や「教員を志望する学生としての特徴的な視点の獲得」が見られたかどうかを調査した。

「英語で読むこと」に関するアンケート

組 番 氏名 _____

この調査票では皆さんの「英語で読むこと」について尋ねています。自分が英語を読んでいる時を思い出して下さい。それぞれの質問項目について、自分の考え、感じ方にあてはまる度合いを、下の尺度に従って、1～5の番号で示してください。

1 あてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 あてはまる

1. 易しい英語の本を沢山読むことは簡単である。	1 _____
2. 読むスピードが速くなるように英語の本を読む（読んでいる）。	2 _____
3. 高校、大学で英語を読む必要があるので英語の本を読む（読んでいる）。	3 _____
4. 英語の本を読んで新しい知識を広げたい。	4 _____
5. 大学入試、就職試験に合格するために英語の本を読むようにしている。	5 _____
6. 易しい英語の本を読むことは楽しい。	6 _____
7. 成績を上げるために英語の本を読む（読んでいる）。	7 _____
8. 易しい英語の本を沢山読める自信がある。	8 _____
9. 難しい単語がある英語の本は読みたくない。	9 _____
10. 友達の感想を聞いて英語の本を（更に）読もうと思った。	10 _____
11. もっと教養を身につけるために英語の本を読む（読んでいる）。	11 _____
12. 易しい英語の本を沢山読むことに苦勞はない。	12 _____
13. 将来良い仕事につくことができるように、英語の本を読む（読んでいる）。	13 _____
14. 英文を読むときは精読よりも多読の方が好きだ。	14 _____
15. インターネットの情報が読めるようになるために英語の本を読む（読んでいる）。	15 _____
16. 授業での課題だから英語の本を読む（読んでいる）。	16 _____
17. 英語でメール交換ができるようになりたいから、英語の本を読む（読んでいる）。	17 _____
18. 知らない単語が出てくると、すぐに辞書を引きたくなる。	18 _____
19. 英語の本を読むことはおもしろい。	19 _____
20. 英語の本を読むと英文学を理解でき、その良さがよく分かるようになる。	20 _____
21. 英語の本を読んで視野を広げたい。	21 _____
22. 英語の本を読んでいる最中に邪魔されたくない。	22 _____
23. 英文を読む前に、読んでも分からないのではないかと不安になる。	23 _____
24. 易しい英語の本を沢山読むには頑張らなければならない。	24 _____
25. もっと英語の本をスラスラ読めるようになりたい。	25 _____
26. 英語の新聞や雑誌が読みたいから英語のリーディングを学んでいる。	26 _____
27. 英文を読んでいて、少しくらい内容が分からなくても気にしない。	27 _____
28. 大学入試、就職試験の長文に強くなるように英語の本を読む（読んでいる）。	28 _____
29. 周りの友達が英語の本を読んでいるから自分も読んでいる。	29 _____
30. 英語の本を読んで、英語圏の文化や習慣についてもっと知りたい。	30 _____
31. 英語の勉強の中ではリーディングが好きだ。	31 _____

図1 「英語を読むこと」に関するアンケート

【2019年度 アンケート集計結果】

項目	事前 (n=118)			事後 (n=118)			t	p
	平均	標準偏差	標準偏差	平均	標準偏差	標準偏差		
1	3.37	1.273	1.273	4.51	0.637	0.637	-10.063	0.000
2	1.95	1.168	1.168	3.31	1.068	1.068	-10.776	0.000
3	2.03	1.180	1.180	2.69	1.209	1.209	-4.700	0.000
4	3.54	1.152	1.152	3.91	0.996	0.996	-3.576	0.001
5	2.08	1.166	1.166	2.58	1.150	1.150	-4.029	0.000
6	3.56	2.966	2.966	4.37	0.913	0.913	-3.017	0.003
7	1.95	1.085	1.085	2.67	1.170	1.170	-5.231	0.000
8	2.75	1.226	1.226	3.97	0.965	0.965	-10.680	0.000
9	3.74	1.066	1.066	3.36	1.159	1.159	3.567	0.001
10	2.23	1.033	1.033	3.32	1.101	1.101	-8.994	0.000
11	2.28	1.190	1.190	3.19	1.070	1.070	-7.611	0.000
12	2.97	1.310	1.310	4.02	1.013	1.013	-9.659	0.000
13	2.25	1.154	1.154	2.74	1.089	1.089	-3.916	0.000
14	2.94	1.367	1.367	3.83	1.157	1.157	-6.187	0.000
15	1.86	1.029	1.029	2.46	1.099	1.099	-5.024	0.000
16	3.08	1.265	1.265	2.95	1.061	1.061	0.974	0.332
17	1.92	1.067	1.067	2.25	1.117	1.117	-3.379	0.001
18	3.51	1.279	1.279	3.36	1.129	1.129	1.179	0.241
19	3.11	1.204	1.204	4.16	0.906	0.906	-10.447	0.000
20	2.75	1.156	1.156	3.56	1.017	1.017	-7.422	0.000
21	3.56	1.230	1.230	4.03	0.956	0.956	-4.259	0.000
22	3.12	1.302	1.302	3.41	1.064	1.064	-2.060	0.042
23	3.59	1.269	1.269	3.14	1.263	1.263	3.899	0.000
24	3.45	1.251	1.251	2.92	1.321	1.321	3.878	0.000
25	4.35	0.973	0.973	4.29	0.997	0.997	0.601	0.549
26	2.03	1.113	1.113	2.78	1.170	1.170	-6.060	0.000
27	3.51	1.239	1.239	3.61	1.162	1.162	-0.787	0.433
28	2.40	1.241	1.241	2.75	1.126	1.126	-3.124	0.002
29	1.36	0.594	0.594	2.22	1.031	1.031	-8.544	0.000
30	3.21	1.326	1.326	3.62	1.161	1.161	-3.976	0.000
31	3.11	1.280	1.280	3.25	1.126	1.126	-1.135	0.259

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

【2018年度 アンケート集計結果】

項目	事前 (n=50)			事後 (n=50)			t	p
	平均	標準偏差	標準偏差	平均	標準偏差	標準偏差		
1	3.24	1.117	1.117	4.54	0.613	0.613	-8.561	0.000
2	1.80	0.926	0.926	3.26	1.226	1.226	-6.816	0.000
3	1.84	1.057	1.057	2.76	1.205	1.205	-5.379	0.000
4	3.48	1.249	1.249	4.30	0.886	0.886	-5.098	0.000
5	1.74	0.922	0.922	2.52	1.147	1.147	-4.732	0.000
6	3.52	1.199	1.199	4.60	0.728	0.728	-5.645	0.000
7	1.88	1.062	1.062	2.90	1.266	1.266	-5.127	0.000
8	2.68	1.077	1.077	4.22	0.815	0.815	-9.084	0.000
9	3.38	1.176	1.176	3.44	1.146	1.146	-0.266	0.791
10	2.32	0.935	0.935	3.38	1.210	1.210	-5.225	0.000
11	2.40	1.278	1.278	3.26	1.103	1.103	-3.952	0.000
12	2.76	1.135	1.135	4.22	1.075	1.075	-7.072	0.000
13	1.90	0.995	0.995	2.82	1.190	1.190	-4.863	0.000
14	2.64	0.942	0.942	4.16	0.955	0.955	-7.998	0.000
15	1.78	0.932	0.932	2.62	1.193	1.193	-4.571	0.000
16	2.70	1.249	1.249	3.00	1.245	1.245	-1.271	0.210
17	1.80	0.948	0.948	2.56	1.248	1.248	-3.569	0.001
18	3.50	1.298	1.298	3.76	1.061	1.061	-1.589	0.119
19	3.28	0.991	0.991	4.40	0.756	0.756	-7.082	0.000
20	2.68	1.269	1.269	3.90	1.111	1.111	-5.545	0.000
21	3.52	1.282	1.282	4.24	0.938	0.938	-3.934	0.000
22	3.48	1.313	1.313	3.96	0.925	0.925	-2.585	0.013
23	3.30	1.266	1.266	3.18	1.173	1.173	0.694	0.491
24	3.38	1.292	1.292	2.72	1.070	1.070	3.818	0.000
25	4.32	0.935	0.935	4.52	0.863	0.863	-1.278	0.207
26	1.92	1.047	1.047	2.54	1.199	1.199	-3.353	0.002
27	3.04	1.195	1.195	3.56	0.951	0.951	-2.834	0.007
28	1.76	0.894	0.894	2.66	1.189	1.189	-5.927	0.000
29	1.50	0.647	0.647	2.26	1.026	1.026	-5.161	0.000
30	3.38	1.244	1.244	4.10	0.931	0.931	-4.846	0.000
31	2.76	1.287	1.287	3.64	1.258	1.258	-4.205	0.000

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表2 英語を読むことに関するアンケート結果

4. 結果

4.1 「英語を読むこと」に関するアンケートについて

学生の「英語を読むこと」に関する情意面の変容を検証するため、第1回調査及び第2回調査のそれぞれにおいて事前と事後に行った選択式アンケートの平均値の差を両側検定の t 検定により検討した(表2)。その結果、どちらの年度も26の項目において平均値の差が有意であった。その中で、平均値がマイナスに変化した結果、差が見られた項目は表3のようになった。

表3 平均値がマイナスに変化した結果、差が見られた項目

第1回調査 (2018)			第2回調査 (2019)		
平均値がマイナスに変化した項目	平均値		平均値がマイナスに変化した項目	平均値	
	事前	事後		事前	事後
24. 易しい英語の本を沢山読むには頑張らなければならない。	3.38	2.72	9. 難しい単語がある英語の本は読みたくない。	3.74	3.36
			23. 英文を読む前に、読んでも分からないのではないかと不安になる。	3.59	3.14
			24. 易しい英語の本を沢山読むには頑張らなければならない。	3.45	2.92

4.2 多読に対する意識を調査するためのアンケートについて

多読に対する意識を調査するために行った6項目4件法による選択式アンケート結果は、第1回調査については表4、第2回調査については表5のようになった。第2回調査の項目4を除き、その他の項目全てにおいて「4：大いにあてはまる」「3：あてはまる」という肯定的な回答がおよそ80%以上となった(第2回調査の項目4のみ78.5%)。記述式アンケートの回答については、次章において述べていくこととする。

表4 第1回調査 (2018) アンケートの結果 (n=54) ※ () %

項目	4	3	2	1
1. 楽しんで読めた	45 (83.3)	9 (16.7)	0	0
2. 英語を読むことに抵抗がなくなった	20 (37.0)	29 (53.7)	5 (9.3)	0
3. はやく読めるようになった (実感として)	13 (24.1)	34 (63.0)	7 (12.9)	0
4. 語彙や英語表現の知識が増えた	13 (24.1)	36 (66.6)	5 (9.3)	0
5. 違った文化を知ることができた	30 (55.6)	15 (27.9)	8 (14.8)	1 (1.8)
6. 多読を続けたいと思う	23 (42.6)	29 (53.7)	2 (3.7)	0

※評価：「4：大いにあてはまる」「3：あてはまる」「2：あまりあてはまらない」「1：全然あてはまらない」

表5 第2回調査(2019)アンケートの結果(n=116) ※()%

項目	4	3	2	1
1. 楽しんで読めた	92 (79.3)	24 (20.7)	0	0
2. 英語を読むことに抵抗がなくなった	47 (40.5)	58 (50.0)	10 (8.6)	1 (0.9)
3. はやく読めるようになった(実感として)	25 (21.6)	78 (67.2)	13 (11.2)	0
4. 語彙や英語表現の知識が増えた	24 (20.7)	67 (57.8)	24 (20.7)	1 (0.9)
5. 違った文化を知ることができた	57 (49.1)	37 (31.9)	21 (18.1)	1 (0.9)
6. 多読を続けたいと思う	51 (43.9)	61 (52.6)	3 (2.6)	1 (0.9)

※評価:「4:大いにあてはまる」「3:あてはまる」「2:あまりあてはまらない」「1:全然あてはまらない」

5. 考察

5.1 英語を読むことに対する情意面の変容について

アンケートの結果から、学生にとって英語絵本の多読は「英語を読むこと」に関して様々な影響を与えたように思われる。第1回調査においても第2回調査においても、内発的動機づけに関する項目6「易しい英語の本を読むことは楽しい」、項目19「英語の本を読むことはおもしろい」が肯定的に変化していることから、学生は進んで英語絵本を読もうとする態度が身に付いてきたと考えられる。第2回調査では項目31「英語の勉強の中ではリーディングが好きだ」に有意な差が見られなかったことから、第1回調査時に履修した比較的英語に興味関心のある学生にとっては、本研究デザインによる多読により一般的なリーディングも好ましく思うようになるが、第2回調査時の一部に英語を苦手とする学生がいた場合には、そこまでの変容は見られなかったと考えられる。もう少し長い期間多読活動に取り組むことができれば、第2回調査の学生集団においても第1回調査と同様の変容が見られるのではないと思われる。

両調査に共通して差が見られなかった項目には、項目16「授業での課題だから英語の本を読む(読んでいる)」、項目18「知らない単語が出てくると、すぐに辞書を引きたくなる」、項目25「もっと英語の本をスラスラ読めるようになりたい」がある。項目16は「英語を読むことに対する義務的・消極的な外的動機づけ」を、項目18は「多読に対するネガティブな態度・姿勢」をそれぞれ表す項目である。本研究における多読ではこれらの項目に変容が見られなかったことから、やはりもう少し長い期間多読に取り組むことができれば多読の影響について何らかの示唆を得ることができると考えられる。項目25については、事前事後とも平均値が非常に高かったことから差が見られなかったものと思われる。4.2に示されているように、学生は多読により英語を速く読むことができるようになったと感じているおり、さらにスラスラとよむことができるようになりたいという意識をもっているように思われる。

第1回調査において差が見られたものの、第2回調査には差が見られなかった項目としては、項目27「英文を読んでいて、少しくらい内容が分からなくても気にしない」と項目31「英語の勉強の中ではリーディングが好きだ」がある。項目31については前述したが、項目27につ

いても、英語に興味関心のある学生は多少内容が分からない部分があっても文脈全体から意味を理解することができるようになったが、英語を苦手とする学生を含む集団ではそこまでは達していない様子をうかがうことができる。やはり、より長い期間多読に取り組むことができれば、文脈から分からない部分の意味を推測する力が身に付いてくるのではないかと考える。

第2回調査において差が見られたものの、第1回調査には差が見られなかった項目としては、項目9「難しい単語がある英語の本は読みたくない」と項目23「英文を読む前に、読んでも分からないのではないかと不安になる」がある。第1回調査の学生は両項目において事前事後の平均値とも3に近い数値を示していることから、多読による変容は見られなかったものの、英語を読むことに対するイメージとしてはポジティブであるともネガティブであるとも結論づけることはできない。また、第2回調査の項目9及び項目23の変容と、前出の項目27の結果と照らし合わせると興味深い考察が得られる。第2回調査に関して、学生は「難しい単語があるかどうか分からないが、英文を読む前に不安を感じることはなく、英文を読んでみる。しかし、読みながら内容が分からない部分があると、そこが気になる」という英語絵本の読みをしている様子を伺うことができる。これは、まず英語を読もうとする態度が育成された後に英語力が身に付いていくという、多読の先行研究結果にも符合する。

「英語を読むこと」に関するアンケート結果から、英語絵本の多読は、学生の英語を読むことに対する内発的動機づけを高め、英語を苦手と感じている学生の英語を読むことに対する不安感を軽減したように思われる。今後も、小学校教員を目指す学生に対して、英語に対する肯定的な姿勢を身に付けさせるために、授業内で英語多読を行わせることはよい手立てになると考える。

5.2 多読に対する意識を調査するためのアンケートの結果と英語絵本から知る異文化

多読に対する意識を調査するための選択式アンケート結果では、「1. 楽しんで読めた」と肯定的な回答をした学生は両年度で行われた調査のいずれにおいても100%となった。また、「2. 英語を読むことに抵抗がなくなった」に肯定的な回答をした学生が、第1回調査（2018）は90.7%、第2回調査（2019）も90.5%となっており、英語多読は学生の苦手意識を和らげたことを表している。さらに、「5. 違った文化を知ることができた」という、英語絵本の多読を始める前に筆者から特に説明のなかった観点に対して、両調査とも80%以上が肯定的回答をしていた。回答理由に関する短いコメントには、「日本にはあまりしないイベントの話などもあり、海外ではこんなことをするのかと知ることができた。」「本文だけでなくイラストからもいろんな髪色の子どもなどいて文化の違いを知ることができた。」といった記述があり、異文化を知ることに関心を持った様子や、イラストにも多文化を感じる学生がいたことが分かった。第2回調査の学生のなかには、多読全般に関する感想として以下のように書いているものがあった。

他国のいろいろな動物の鳴き声であったり、外国独特のジョークなどが混じっていて読んでいて新鮮でおもしろかったです。他国の本を読むことでこんなにも自分の中の知識が増えるとは思っていなかったのうれしいです。外国の本を読む機会はなかなか自分だけでは作らないので授業を通して読むことができてよかったです。

(原文のまま)

このように、英語絵本という教材を通した多読によって、学生が異文化に自発的に気づき、異文化を学ぶことができるのであれば、コア・カリキュラムにある「外国語に関する専門的事項」で取り上げられている異文化理解を学ぶ教材として英語絵本を用い、多読を行う意味を見出すことができるであろう。

5.3 教材としての英語絵本と教員を目指す学生の気づき

学生自身が異文化を学ぶだけではなく、教員を目指す学生が、教材としての英語絵本について語る以下のような記述がどちらの年度にも多くみられた。

- ・絵や写真が多い本は読みやすいので、学級文庫などにおいて子どもたちにも読んでもらいたい。(第1回調査)
- ・児童に読んであげるための本としても使ってみたい。(第2回調査)
- ・子ども用の絵本でも十分勉強になる。児童が英語に少しでも興味をもつきっかけになる。(第2回調査)

これらの記述から、教員としての視点を持つことのできた学生がいることが分かる。

また、多読を指導法として考える学生にとっては、今回の多読を良い体験をとらえ、児童にも取り組ませたいと考えている姿が見られる。

- ・多読をして英語を学ぶことは楽しいと思うようになったように、自分も教員になった際に取り入れたい。(第1回調査)
- ・英語の絵本を体験したようにレベル分けして、プチ多読ができるような教室コーナーを作り教員からも紹介していくなど想像が膨らみました。(第1回調査)
- ・内容的に小学校低学年・中学年は難しいが、高学年の担任になった際は多読の時間をもうけたいとおもった。(第2回調査)

こういった記述から、小学生にも多読ができるかどうかを考えたり、教室の具体的なプランも考えたりするなどといった教員としての視点が学生の中に生まれている様子を伺うことができる。

また、「教員になる者としての英語の勉強方法として多読を取り入れたい(第1回調査)」という記述も見られたことを考えると、教師になることを意識させることのできる英語絵本の多読を、小学校教員養成課程の授業で行うことは意義があるといえる。

6. まとめと今後の課題

小学校教員養成課程における大学生に英語絵本多読に取り組ませた後、英語学習（特に英語を読むこと）に対する情意面の変化を調査したところ、苦手意識を持っていた学生はそれを克服し、英語を読むことを楽しいと感じるようになっていたことが分かった。また、学生は絵やストーリーからその背景にある文化を読み取り、日本のそれと比較をすることで、より能動的に異文化を理解することができたようであった。そして、児童にも英語多読をさせることで英語の楽しさを伝えたいと考える姿や、多読を通して教師として児童に教えるために必要となる自分自身の英語力を伸ばしたいと考える姿を見ることができるようになった。

英語絵本の多読により見られたこれらの変容は、小学校教員養成課程における学生に対して、以下のような点で肯定的な影響を与えることができるのではないかと考える。

- ・小学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラムの「外国語に関する専門的事項」に示されている英語運用力を高めさせるための、英語学習に対する学生の動機づけの向上
 - ・同コア・カリキュラムに示されている異文化理解の学び
 - ・小学校で教職に就くという意識の向上
- 今後の課題としては、酒井・内野（2017）でも述べられている以下の2点が挙げられる。
- ・コア・カリキュラムの内容をより確実に定着させること
 - ・大学における養成期間中に英語力を向上させること

1点目については、多読活動とは別に、今後もより適切なカリキュラムを組むことができるように考えていかなければならないであろう。2点目については、教育課程における「外国語に関する専門的事項」と「外国語の指導法」の2時間のみで英語力を向上させることは難しいかもしれない。しかし、本研究では英語絵本の多読による、学生の英語学習に対する動機づけの変容は検証をしたが、英語力に関する検証は行っていない。この点について、今後調査を行っていきたいと考える。

最後に、第2回調査の2019年度履修学生の自由記述のなかから学生の多読活動に対するコメントを取り上げる。

中学校に入学して本格的に教科として英語と対峙したときからずっと英語が苦手で、文を書くのはもちろん読むのものすごく嫌で入試でも避けた。しかし多読をはじめてからは少しずつ英語を読むことに抵抗感がなくなってきて、好きなジャンルならもっと読みたいと思うほどになった。これからも多読を続けて語彙を増やし、ゆくゆくは英語で日記などもつけてみたい。

将来子どもたちに自信をもって指導する学生を育成するため、このような英語を学ぶ意欲を取り戻した声が多く聞くことができるよう、今後も「外国語に関する専門的事項」と「外国語の指導法」の授業内容の改善に努めていきたい。

【付記】本稿は、2019年度愛知淑徳大学研究助成を受けて実施した「小学校における英語絵本を用いた、英語の「読む」力の指導法に関する研究」（特定課題研究19TT02）の一部である。また、2018年度調査については、2019年度中部地区英語教育学会石川大会にて口頭発表を行った内容が含まれる。

注

1 CEFRとは、Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment 外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠のことである。ヨーロッパ協議会が2001年に発行した外国語学習、教育及び評価のガイドラインである。外国語としての運用能力（聞くこと、読むことなど）到達目標を6つの段階で表しており、ヨーロッパのみならず様々な国や地域の教育機関で利用されている国際的な基準である。

引用・参考文献

- Al-Homoud, F. & Schmitt, N. (2009) Extensive reading in a challenging environment: a comparison of extensive and intensive reading approaches in Saudi Arabia. *Language Teaching Research*, 13 (4), 383-401.
- 有田由紀子 (2009) 「多読による文脈処理能力向上の可能性」『茨城大学人文学部紀要人文コミュニケーション学科論集』6, 247-262.
- Day, R., & Bamford, J. (1998) *Extensive reading in the second language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Elley, W. B., & F. Mangubhai. (1983) The impact of reading on second language learning. *Reading Research Quarterly*, 19 (1), 53-67.
- Hafiz, F. M., & Tudor, I. (1989) Extensive reading and the development of language skills. *ELT Journal*, 43 (1), 4-13.
- 長谷尚弥・釣井千恵・ハーバード久代・山科美和子・中野陽子 (2015) 「授業内 SSR を中心とした多読指導が英語学習者のリーディングに対する姿勢に与える影響について」『国際学研究』4 (1), 1-8.
- Horst, M. (2009) Developing definitional vocabulary knowledge and lexical access speed through extensive reading. In Z. Han & N. Anderson (Eds.), *Second language reading: Research and instruction*. Ann Arbor, MI: The University of Michigan Press, 40-64.
- 猪井新一 (2009) 「英語活動に関する小学校教員の意識調査」『茨城大学教育実践研究』28, 49-63.
- 今村一博 (2011) 「多読が単語・コロケーション・定型句・反義語の認識（アクセス）速度に及ぼす影響」『Language Education & Technology』48, 185-214.
- Mason, B. and S, Krashen. (1997) Extensive reading in English as a foreign language.

- System*, 25 (1), 91-102.
- 松井孝彦（2008）「中学校における 10 分間読みの効果 — 読解力と動機づけの観点から」『中部地区英語教育学会紀要』第 38 号, 15-22.
- Matsui, T., & Noro, T. (2010) The effects of 10-minute sustained silent reading on junior high school EFL learner's reading fluency and motivation. *ARELE*, 21, 71-81.
- 松井孝彦（2011）「中学校における 10 分間多読の効果－読書量と語彙処理の速度の観点から」日本教科教育学会第 37 回全国大会口頭発表.
- 松井千代・松井孝彦（2016）「短期大学生に対する英語の授業内多読－英語を読むことに対する情意面への影響－」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』第 49 号, 57-64.
- 松井千代・松井孝彦（2017）「保育系短期大学生に対する英語多読－読解力と情意面への影響及び読みの傾向」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』第 50 号, 67-76.
- 黛道子（2005）「英語多読授業の導入と成果－短期大学における 2 年間の実践より－」『順天堂大学医療看護学部医療看護研究』第 1 巻, 22-28.
- 水野知津子（2016）「香川高専学生の英語苦手改善・英語力向上への試み－多読の有効性を考える－」『英語教育研究』Vol.39, 57-67.
- 名畑目真吾（2014）「小学校教員を志望する大学生の英語活動に関する意識調査」『小学校英語教育学会誌』14 (01), 131-146.
- 日本多読学会「日本多読学会による英語多読指導ガイド」https://jera-tadoku.jp/ER_Teaching_Guide-20200125.pdf (2021 年 1 月 24 日)
- 日本多読研究会「多読で英語に親しみませんか」<http://www.seg.co.jp/sss/learning/> (2021 年 1 月 24 日)
- 酒井英樹・内野駿介（2018）「小学校教員養成において必要とされる知識・能力に関する大学生の自己評価－小学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラムの点から－」『小学校英語教育学会誌』18 (01), 100-115.
- 鈴木寿一（1996）「読書の楽しさを経験させるためのリーディング指導」渡邊時夫編著『新しい読みの指導』116-123, 三省堂.
- Takase, A. (2007). Japanese high school students' motivation for extensive L2 reading. *Reading in a Foreign Language*, 19 (1), 1-18.
- 高瀬敦子（2010）『英語多読・多聴指導マニュアル』大修館書店.
- 釣井千恵（2016）「多読用教材（Graded Readers）を使用した読みの指導が与える影響：非英語専攻の初級レベル学習者を対象とした場合」『人間文化研究』（4）, 37-77.
- 内山由香里（2008）「辰野高校における英語多読授業の試み」『日本多読学会紀要』第 2 巻, 37-44.
- 山下淳子（2007）『外国語の読みにおける流暢さ（reading fluency）の構成概念と測定』平成 16～18 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書.